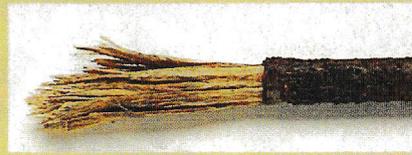
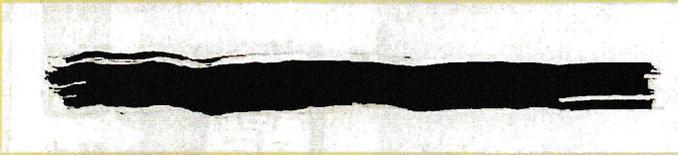


草木筆

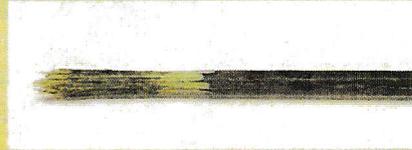
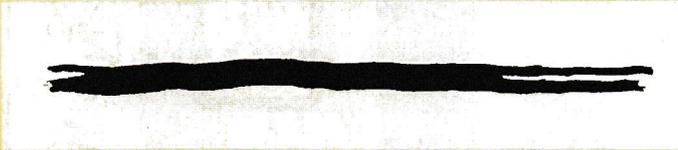
自分の気持ちを伝える筆を、自分の手で作る

葛



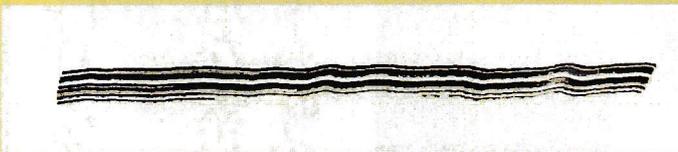
↑葛の木質化した蔓は繊維が多く、草木筆にしやすい。毛筆より荒々しく、勢いのある太い線が書ける。

竹



↑表皮を剥ぎ、叩いてほぐせば筆になる。繊維は強く弾力に富み、鋭い掠れた線が表現できる。青い若竹が向く。

割り箸(平)



↑割り箸の先を叩いて平らにつぶすだけで、平筆になる。細かい不規則な編が、面白い表現を生み出してくれる。

割り箸(丸)



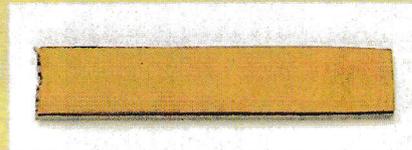
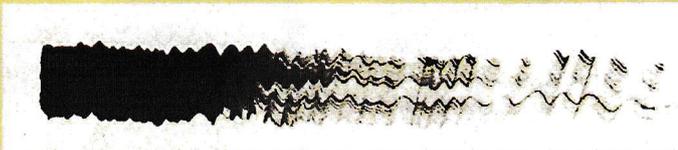
↑割り箸の先を鉛筆のように削り、軽く叩いてほぐす。掠れをともなった、やわらかな線になる。

竹箒の穂



↑庭を掃く竹箒の穂を1本拝借し、先を軽く数回叩く。細く鋭い線が出る。年賀状の表書きに使っても面白い。

段ボール



↑適当な幅に切り、切り口に墨をつけて揺らして書けば、空海の「飛白体」さながら。ペニヤ板も同様に使える。

草木筆は決して新しい試みでなく、先人から受け継いだものだと岡本さんはいう。左ページで紹介する空海や、室町期の僧、一休(1394~1481)ら、歴史上の名書家も、草木筆を用いている。「空海は板切れのようなもので、呪術的な『飛白体』の書を遺しました。一休は竹筆のバリバリした線で、禪の揺るぎない精神を伝えていきます。素材を選べば、自分の気持ちをそのまま文字に反映できる。これも草木筆の特徴です」

草木筆の素材は、身の回りにいくらでもある。伝統的なのは葛や竹だが、割り箸や爪楊枝、庭を掃く竹箒、段ボールやペニヤ板も筆になる。墨はいちいち磨らなくても、手軽な墨汁で構わない。

既製品でなく、自分だけの筆を作るというのも楽しみのひとつ。作り方は至って簡単だ。

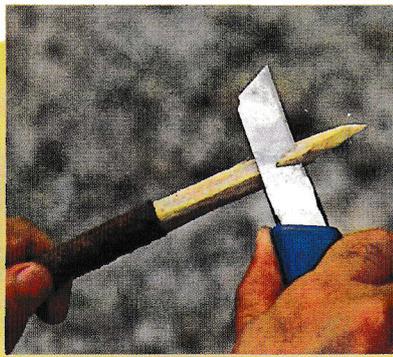
「草木筆を作るには、叩く、縛るのふたつの方法があります。木の枝や竹は、叩いて繊維をほぐす。松葉などは縛って筆状にします」

草木筆の最大のコツは「上手く書こうと思わないこと」と岡本さん。手本を忘れ、書き順も無視し、肩の力を抜いて、筆の命ずるままに書く。そうすれば自然に、めだたい文字が生まれるだろう。

●葛の筆を作る



5 ↑繊維がほぐれたら、毛先をハサミで切って形を整える。穂が長い場合は切り詰める。



3 ↑筆の穂先になる部分を、鉛筆を削る要領で尖らせる。あまり丁寧にやる必要はない。



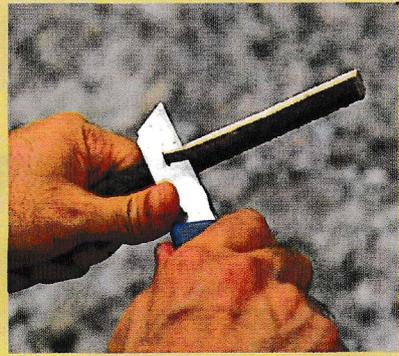
1 ↑葛の木質化した部分を使う。先端から約10cmのところを、カッターで円周状に浅く切り込む。



6 ↑毛先が広がりすぎたと感じたら、輪ゴムを巻いて数日置き、形を整える。



4 ↑穂先から順に、ゴムハンマーや金槌で叩いて繊維をほぐす。軽く、ゆっくり叩くのがコツ。



2 ↑切り込みを入れた所から先端まで、硬い表皮を削ぎ取る。白い部分が見える程度でよい。

名人に倣う①

空海「真言七祖像」より「梵名」

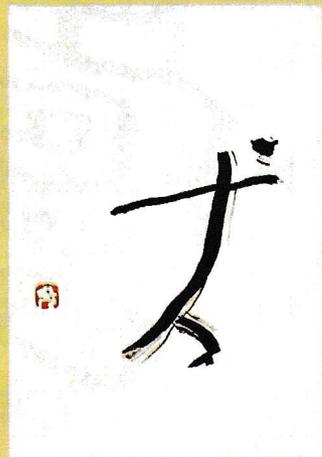


←空海（774～835）は真言宗の開祖。中国に学んで日本の書の礎を築いた。「梵名」（インド名の意）は、板切れのようなものを使って「飛白」という書体で書いたもの。飛白

体は中国・唐代の皇帝も用いた書体で、靈力の特に強いものとされた。韓国では今でも、縁起のいい書体として尊ばれている。段ボールでこの味わいを再現してみたい。東寺蔵



→素材の違いで、印象はがらりと変わる。上は葛で力強い犬を表現。下は割り箸（丸）で書いた愛らしい犬。「何でも筆にして書いてみて、自分に合うものを見つけてください」（岡本さん）



●筆による印象の違い